

早稲田大学
創造理工学部・研究科
広報誌

2015

13

Creative People

Interview

創造人

<http://www.cse.sci.waseda.ac.jp/>

建築学科

有賀隆 教授

フィールド：まちづくり、都市計画、
建築学

「継承と革新の精神で築く
住み続けられるまちづくり」



〒169-8555
東京都新宿区大久保 3-4-1
Tel 03-5286-3000
Fax 03-5286-3500

経済的な視点だけに偏らず 歴史的・文化的な価値を踏まえた上で 住民にとって住み心地のよいまちにするには 地域住民自身が選択できるまちづくりが必要

都市開発を手掛ける民間企業勤務を経て、カリフォルニア大学バークレー校環境デザイン学研究所 Ph.D.プログラムに留学した際、有賀先生は強力な法制度と巨大な投資で中心市街地を改造するだけでは、根本的な問題を解決することはできないと実感されます。かたちを整えるだけでなく、住民が自立的に住み続けられるまちづくりを目指し、日本のみならず、世界各地を奔走する有賀先生が、これからのまちづくりを語ります。

歴史的な住環境と 住み続けられるまちづくり

私の研究テーマを一言で表せば、「住み続けられるまちづくり」です。

少子高齢化社会、人口減少社会を迎えて、さまざまな問題が起きていることはご承知の通りです。いかにして時代や社会の変化に対応し、都市の機能を持続するのか。どうやって住民にとって快適な住環境を提供するのかは、都市計画にとって大きな課題です。

日本の都市は、その成り立ちから大きく2種類に分類できます。ひとつは、中世以降、近世にかけて成立した日本古来の町です。城下町、宿場町、門前町などがその代表的な例でしょう。農村集落、漁村集落なども含まれます。もうひとつは、ニュータウン——戦後、山や田畑を開発して作られた計画的なまちです。このうち、特に前者において住み続けられる住環境を提供するのは、意外と難しいことなのです。

日本古来のまちの中心市街地には、文化や歴史があり、それらにまつわる生業もさまざまです。文化的・歴史的な資産を受け継ぐための職業もあります。神社や寺院が残っていて、神事・仏事としての祭りがあり、人を集める場所も仕掛けも存在する地域もあるでしょう。

こう表現すると、住んでみたいと思うかもしれません。

しかし、こうした旧市街地の歴史的な住環境のなかで、現代の若い人たちが将来に夢や希望をいだき、住み続けようと思えるライフスタイルを実現するのはたやすいことではありません。現代的で便利な生活をしたいと思う若者世代をどのようにすれば惹きつけることができるでしょうか。

具体的な例を挙げてみましょう。

私がまちづくりに携わっている福島県白河市は、東北の玄関口に位置する小峰城の旧城下町で、武家地や町屋だった土地が

残るのですが、その街区は間口が狭く、奥行きが長い。間口が7メートル程度、奥行き20~30メートル程度という建物敷地が並ぶのです。店舗を構える人でなければ、こうした土地は使いにくいでしょう。旧街道沿いの歴史的な街並みを守っていくため、玄関口に自家用車を駐車しにくい点も、現代人にとっては使いにくい。しかし、敷地ごとに地権者が異なることが殆どで、そのため街区全体を大掛かりに変更するのは現実的ではありません。

では、地権者が「景観なんか残さなくていい」と考えて、この間口の狭い敷地に次々とマンションを建設したらどうなるのでしょうか。最初の1棟目は、日当たり良好なマンションになります。しかし、他の地権者たちが続けば、奥行きが長い壁のようなマンションが歴史的な街並みの中に建ち並ぶことになりそうです。果たしてこれで住みやすく魅力的なまちになるのでしょうか。

「住み続けられるまちづくり」を本当に実現するためには、これまでに築いてきた歴史的価値を継承しつつ、現代に適応した住環境を生み出すという創造的な革新を実現しなければなりません。



東日本大震災により旧小峰城の石積みが崩落



国際都市デザインワークショップ 唐津

文化的な資産や歴史的な遺産の本質的な価値を見出し、伝える

様々な条件や制約があるまちをどのように住みやすくするのかを考え、計画するのが私たちのまちづくり研究と実践活動の目的です。

私たちはまず地元の地権者、住民、行政や建築・都市計画の専門家など、その地域やコミュニティに関わるさまざまな担い手に集まっていただき、まちづくりのための土台となるプラットフォームを組織します。そして、多様な意見を集約し、いくつかの計画案（シナリオ）を立てるデザインワークショップを開催。そのシナリオに基づき、CGや模型を作成し、街並みをどのように修景していくかを提示します。また、住民一人ひとりの生活がどのように変化するかというシミュレーションも作成・提示します。このようなプロセスデザインの提案を繰り返し、錯綜する利害を整理しながら、関係者が合意可能なまちづくりの基本計画を作るのです。

白河市は全国的にも珍しく、それぞれ個別にできた3つのまちづくり計画を同時に進めています。「中心市街地活性化のまちづくり」「景観のまちづくり」「歴史まちづくり」の3つで、私たちはこの内「景観まちづくり」と「歴史まちづくり」の調査、研究と構想立案のための地域住民ワークショップなどを手掛けました。

この計画を立てる際に考えたのは、文化的、歴史的な遺構の本質的な価値とは何かという点でした。たとえば、明治以降の近代化の過程で、小峰城址は国体会場や野球場、またバラ園や公園として活用されてきました。小峰城址は国の史跡指定を受けているのですが、それは石積が非常に精密で見事だからです。どのくらい精密なのかと言うと、東日本大震災で被災し、約7000個の石が崩落してしまったのですが、それを元通りの位置を同定して復元するのは、最新型のスーパーコンピューターで

長い時間を費やして解析しても至難の状態であることが分かったのです。震災後に解析作業を始め、平成29年に復旧予定といえば、どれだけ時間のかかることなのかが分かるでしょう。私たちは白河市に固有の歴史的なシンボルとしての価値はもちろんですが、この石積の技術も後世に残すべき価値だと考えました。この価値を市民にも伝えたいと思い、石積みの復旧工事を進めている現在、当時の技術を解説する展示パネルを城址周辺に設置しています。

また、白河には新撰組が宿営し、明治天皇が行幸された際に宿泊された蔵座敷が脇本陣として現存しているのですが、個人所有だったため、これまで一般公開されてきませんでした。これを市民共有の歴史資産として公開し周辺まちづくりを一体的に進められるように行政に買い取ってもらい、蔵の修復を核としたまちなか市民交流拠点のまちづくり提案を行い、これが受け入れられて、現在事業が進められています。

他にもこうした調査・提案を行ない、歴史文化の記憶の器を将来の市民へ引き継ぐまちづくりを進めています。



地域住民協働のまちづくりワークショップ 白河



3次元都市模型を用いた街並みのデザインシミュレーション

歴史的価値の継承と住環境の「革新」は日本のみならず世界的な課題

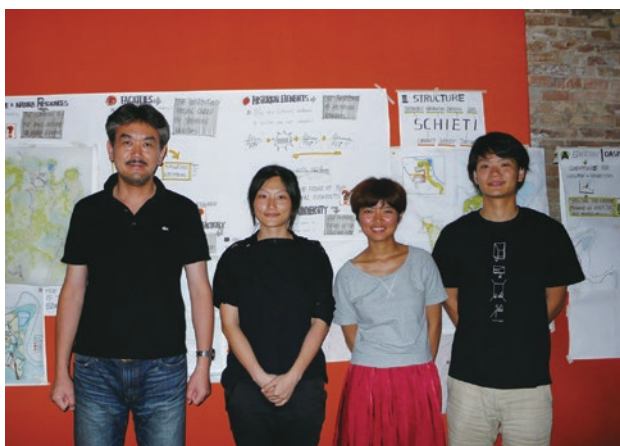
歴史的価値の「継承」と新しい住環境の創造という「革新」は、ほとんどの地方都市が抱える課題です。それだけでなく、世界的な課題でもあります。私たちの研究室は、世界遺産で有名なイタリアのウルビーノ、革新的な都市計画で知られるブラジルのクリチバ、世界最古の都市のひとつ、パレスチナのジェリコなどで地元の自治体や住民、建築家と協働で都市デザインのワークショップを開催してきましたが、現地では抱える問題は、本質的には日本と同じで、「継承」と「革新」をいかに両立するかなのです。

特に世界遺産などを有する都市は、その歴史的・文化的なまちの魅力を高めれば高めるほど、地域住民が住みにくくなるという問題を抱えています。観光客の増加だけではありません。観光の形態が変化し、観光地と住宅地とのゾーニングができなくなり、住民の生活空間を脅かされることも増えています。

このような葛藤を克服するのは容易ではありません。その地域で答えを出すしかないでしょう。ただ、ひとつだけ大切だと思うのは、地域住民が選択できるようなまちづくりになっているかどうかという点です。つまり、まちのあり方を自分たちで選べるかどうかです。

自らが選択したまちの将来像であれば、その目標に向かってそれぞれが生活や仕事を通して、自立的にまちづくりに協働することができる。

これからの都市計画では、住民が選択可能なまちづくりのあり方を作っていくことが、日本でも世界でも重要になってくると思っています。



ユネスコ世界遺産都市ウルビーノでの都市デザイン提案と学生メンバー

